

百田尚樹騒動

加^か野^の
忠^{ただし}
(32経)

84歳の老生でも、マスコミに母校のニュースが出れば無関心ではられない。特に「スーパードグローバル大学創成支援」対象や「指定国立大学法人」に選ばれなかったのは残念だった。

最近Web上で、朝鮮半島の歴史や政治に詳しい筑波大学大学院教授の古田博司氏が、一橋の教師や学生は「考える輩でなく、考えない足」だと批判している文章を読んだ。彼は定年を前に途轍もない事実気づいたという。文系の大学教師の多くは、西洋人の学説を紹介し、日本人の研究を組み合わせ、気の利いたことを一寸付け加え、さらなる史料の発見が待たれるなどと述べるだけで、一人悦に入る「考えない足」だというのだ(産

経ニュース〈正論〉2017/7/26)。

東銀を皮切りにソロモンなど国際金融の修羅場から、還暦を機に別天地のように居心地の良い大学に移り、約12年間過ごした老生としては、この「途轍もない事実」に今更驚くのが不思議だった。

古田教授が一橋の名前をわざわざ挙げた理由は「日本の伝統文化に受け継がれてきた外来の理論や理想に対する反骨と挑戦の持ち主」と彼が称える作家百田尚樹氏を6月のKODAIRA祭に招きながら、反対運動に屈し講演を中止したところにある。

私は、百田氏の講演会が中止された理由は嚴重な警備体制が必要となり、他の企画が犠牲になるなど、新入生のための学園祭の趣旨を損なう恐れが生じたためという記事(ハフポストジャパン2017/6/3)を読んではいしたが、NHKや購読している日経などは取りあげておらず、よくある騒動のひとつくらいに思っていた。

しかし、百田氏が総合オピニオンサイ

ト (IRONNA2017/6/11) に寄稿した手記、

並びに最近出版されたK・ギルバートとの共著『いい加減に目を覚まさんかい、日本人!』祥伝社(16〜21頁)を読むと、講演中止は大学内のレイシズム情報センターという団体による反対運動の結果だという。私は無関心ではいられなかった。

反対派は彼のような人種差別主義者を学園祭で講演させると、差別・テロ扇動を大学が容認することになる、暴力沙汰が起きたら責任をとれるのかなどと実行委員会に迫り、百田氏が従来の差別扇動を撤回し、差別撤廃条約の精神を順守すると誓約しない限り講演開催を許すなど要求し、中止に迫り込んだというのだ。

この騒動に関してはネット上で様々な意見が出ている。例えば、月刊『創』の編集長で「言論と規制」問題に関心をもつ篠田博之氏(51経)は、この10年ほど、講演会や集会に会場を提供している自治体や大学が、めんどろになることを恐れ

て少し脅迫を受けただけで集会を中止してしまおうという萎縮状況が拡大していると懸念する。彼は6月21日の学内集会にも参加し、講演会に反対していたのは一橋大の学生、院生、教員などの複数のグループがあったと述べている（BLOGOS 2017/7/1）。

田中秀臣上武大教授は、「百田尚樹に嫌われる私でも、一橋大『講演中止』の判断は残念に思う」と題して、講演中止で批判されるべきは「言論を卑怯な手段で封殺する力」であり、これは深刻な暴力だと断じている。そして、百田氏の「暴言」があったとしても、賛否あわせての自由な議論こそが重要であり、百田氏の人物を実際に知る機会を放棄したのは残念だという（IRONNA2017/6/5）。

以上様々な意見に接した上で、老生としては、特に以下の問題に関心を抱いた。大学側の見解や如水会諸兄弟の忌憚なきご意見を頂戴できれば幸いである。

3、学生自治について

1、2年生中心の実行委員会では、同氏の講演を学祭の目玉としたかったのだろう。しかしこの論客の講演が孕む大きなリスクとその適切な管理について、招待決定の前に熟慮すべきであった。

学園祭の企画・運営は学生の自治に委ねている。しかし大学側はリスク管理など適切な助言を行ったのか。それとも静観するのが自治尊重なのか。あるいは異端とされる言説にも耳を傾け議論すべき場である大学の使命にも限度があり、学内での衝突回避を優先させたのだろうか。

結び

六十有余年前、一橋寮で仲間と酒を飲みながら、「自由は死もて守るべし」と歌った寮歌「紫紺の闇」を思い出す。

当時は講和条約・安保条約発効、自衛隊発足などで、冷戦激化と保守反動政権復活への不安が高まる安保騒動の前夜であった。しかし皮肉にもその安保に守ら

1、言論の自由について

蓼沼学長は、今春の卒業式式辞の中で大学の研究教育憲章とJ・S・ミルの『自由論』を引用し、事実認識と価値判断で意見の相違を克服するには、「他者との議論」が重要だと強調された。今回の騒ぎは、このような理念に沿わないと思うが、執行部では問題にならなかったのか。

2、ヘイトスピーチについて

百田氏のツイッターでは「もし北朝鮮のミサイルで私の家族が死に、私が生き残ればテロ組織を作って、日本国内の敵を潰していく」など、テロ等準備罪法にも抵触しかねない呟きが散見され、在日外国人は不安になるだろう。自衛本能が衰弱した国民を覚醒させるために意図的に過激な表現を使うのかもしれない。しかし、篠田氏が言うように、ヴォルテールが説く「私はあなたの意見には反対だ、だがあなたがそれを主張する権利は命を

れ、朝鮮動乱の特需をきっかけに高度成長が始まり、我々は自由と経済的繁栄を享受した。

今やパックス・アメリカナは終焉し、急速に世界の多極化が進み、「思想の空の乱れては行くすべ知らぬ仇し世に」なりつつある。自国第一主義を昂然と唱え、新たな均衡を模索しつつ国々が合従連衡をくり返す時代が続くと考えて、「濁流ルビコン」を渡る覚悟と備えをする必要がある。

日本周辺は危機に満ちている。米国指導のリベラルな国際秩序は危機に瀕し、その隙間を縫って中国は覇権的地位を狙う。5月のG7でメルケル独首相が自助の時代への回帰を訴えたように、日本も自国の自由、安全や繁栄維持のために、より主体的な戦略の確立が求められる。このような時代においてこそ、母校の「考える葦」には、是非とも国家戦略の再構築に指導力を発揮できる人材を輩出すべく奮励して頂きたい。

かけて守る」ことを、百田氏が講演反対グループに要求するには、やはり自らの過度の刺激的表現に自制が必要ではないだろうか。

百田氏は自らを「大阪ローカルのお笑いのテレビ構成作家であり、…三流のエンタメ小説家で…政治的思想などは何もない。深い哲学もない。ただ、一介の愛国者にすぎない」と言っている。大学人には論戦相手として扱いにくい人物であろう。しかし百田氏に論争を挑み、人種差別やテロ扇動とみなす発言について論戦する絶好の機会を生かすべきではなかったのか。

ヘイトスピーチ対策法の下で、言論の自由と差別的発言の微妙な境界を、論争を積み重ねることで、より明確化し、言論を委縮させないことが重要ではないのか。また講演反対のグループには教員もいたとする篠田氏の観察が事実なら、彼等は百田氏の言論を力で封じる「考えない足」と言われてしまう。

—貴社のパートナーとして、共に成長・発展を—

松 木 会 計 事 務 所

公認会計士・税理士・証券アナリスト・グローバルCFO（米国CTP）

所 長 松 木 浩 一 （昭51商）

公認会計士、税理士、

ファイナンシャルプランナーその他職員総数17名

〒920-0025 石川県金沢市駅西本町1-13-23

Tel: 076-263-8575 E-mail: matsuki@themis.ocn.ne.jp

後輩CPAの方、新幹線開業の城下町金沢へUターンしませんか。希望者歓迎します。